

Tokyo2020+1 におけるパラリンピック 日本代表選手のサポート

陶山哲夫*¹, 羽田康司*²

東京パラリンピックは当初の開催予定から 1 年延期された 2021 年 8 月 24 日から 9 月 5 日までの 13 日間開催された。本シンポジウムは「Tokyo 2020+1 におけるパラリンピック日本選手団のサポート」と題して、長年パラリンピックのサポートに深く関わっている 4 名のシンポジストにご登壇いただき、それぞれの立場から東京パラリンピック開催までの準備期間から大会本番までの経過と今後の課題について情報共有することを目的として企画された。

和歌山県立医科大学リハビリテーション医学講座の田島文博氏には「パラリンピックと医療支援」と題して、日本パラスポーツ協会医学委員会メディカルチェック部会長の立場から、アテネパラリンピックで明らかになった多数の選手が抱える医学的問題への対応として、北京パラリンピックから開始された参加選手に対する事前メディカルチェックの変遷と苦労についてお話しいただくとともに、東京パラリンピックに向けた日本パラリンピック委員会としての熱中症予防の取り組み、新型コロナウイルス感染症の蔓延する中で感染症対策を講じて開催した日本パラ陸上競技選手権大会での取り組みについてお話しいただいた。

岐阜大学整形外科の青木隆明氏には「パラ水泳選手日本代表選手の医療サポート」と題して、日本パラ水泳連盟チームドクターの立場から、障害者水泳連盟の中にコロナ感染対策委員会を立ち上げクラス分けや合宿、海外遠征の際のマニュアル作成と健康管理、濃厚接触者や感染者になった場合の対応方法策定などに中心的に関わり、パラリ

ンピック期間中は選手村ポリクリニック医師として勤務された経験についてお話しいただいた。

飛翔会グループ株式会社ケアウイングの門田正久氏には「パラリンピック大会におけるトレーナー活動の変遷とこれから」と題して、日本パラスポーツ協会障害者スポーツトレーナー部会長の立場から、20 年以上前から行ってきたパラスポーツ現場で活躍できるトレーナー養成・育成活動の変遷と、東京パラリンピック後のトレーナー育成の足場としての日本障害者スポーツトレーナー学会への期待についてお話しいただいた。

国立成育医療研究センターリハビリテーション科の上出杏里氏には「女性パラアスリート支援の取り組み」と題して、日本パラリンピック委員会(JPC)女性スポーツ委員会委員の立場から、2017 年に JPC に設置され、女性パラアスリートや女性指導者らの抱える課題の実態調査や女性特有の健康問題に関わる相談窓口設置、教育・啓蒙活動、子育て支援など、女性パラアスリート支援に取り組む女性スポーツ委員会の活動と、各競技団体を通じた支援活動の実際についてお話しいただいた。

また陶山座長の指名により筑波大学の羽田康司氏より東京パラリンピック日本選手団本部医師の立場から東京パラリンピックにおける日本選手団医務室運営とコロナ対策の実際に関して述べられ、日本選手団からは幸い感染者を出すことなく大会を終えられたことが報告された。

障害者スポーツに関する事業は永らく厚生労働省が主管していたが、2014 年に文部科学省に移管され、さらには 2015 年にはスポーツ庁が新設され、パラリンピックがオリンピックと一体化して推進されるようになった。東京 2020 開催までは一

*¹ 日本パラスポーツ協会医学委員会委員長

*² 筑波大学医学医療系リハビリテーション医学

体化の動きが目に見えて加速していったが、東京2020が終了した現在は活動支援に関わる予算も場所も下り坂にある。再び厳しい状況に置かれることが予想されるパラスポーツであるが、実際の

サポートに関わる我々が変わらずしっかりとサポートを続けていくことはもとより、パラスポーツに対するこれまで以上の支援が多方面から行われることを願ってやまない。